

つき組のお家の方へ

平成16年7月2日

カミイその後・・・

みなさんのご協力のおかげで、カミイも子供たちのお家にお泊まりできて、嬉しそうです。お家の方からの暖かいお便り、ご紹介します。

昨日から、カミイが明日家にお泊まりだよ。と嬉しそうに話していたので、「どこにおいておこうか？」と考えていました。帰ってくるなり、「カミイにごはんあげなくちゃね。どこにねせようか。」といろいろ考えている様子に思わず、笑顔になってしまいました。きっと、楽しそうにロボットを作ったんだろうなとおもいました。楽しくてにぎやかなお泊まりになりました。

カミイのつぶやき・・・今日のカミイは家のリビングでおやつを食べ、記念撮影もしました。歯磨きもせず？トイレにも行かずソファアでおやすみなさいです。明日の朝、T男が無気に起きてくるのをまっています。(はあ、それにしても、T男くんお父さんに注意される回数すごかったな～疲れちゃったよ、ほんとzzz)

カミイに話は家でもよく話していますよ！今度、泊まりにつれてきていい？って何度も聞いてきます。楽しみにしているみたいです。

センターでは6月30日、誕生会がありました。子供たちは、会の途中カミイがいないことに気がついたのでしょう。部屋からホールにカミイをつれてきて誕生会を一緒にしたんです。あったかいですね～子供たちの心のまっすぐさを感じます。

また、絵本『ロボットカミイ』の中にちびぞうがでできます。それも作りたいと・・・作ってしまった子供たちでした。あちこちちびぞうをひっばっています。これが、いつまで続くやら・・・もしも、消えてしまっても、子供たちの心の中にずっとカミイが居続けて欲しいですね。

つき組たより

～カミイ

No.3

7月20日

子供たちがどのようにカミイを誕生させたか、また、その過程での子供たちの思いは？保育者の思いは？関わりは？・・・など私なりに姿を追って、記録したものをご紹介します。また、お泊まりを続けているカミイの様子やそれに関わる子供たち、家族の姿も連絡帳からご紹介します。家庭で子供たちがカミイに関わる姿を、家族みんなが温かく見守ってくれていることが伝わってきます。

カミイだより (連絡帳より)

★待ちに待ったカミイのお泊まり。夜はどこに寝せようか、一緒に寝たいけど足でふんづけたら大変とあれこれ考えてました。ご飯もカミイに最初食べさせ、その後それを自分の口の中へ。"たかがダンボールで作ったもの"がみんなで大事にして命が宿っているがごとく一生懸命お世話している姿に、簡単な言葉でしか言い表せませんが、思いやりのすばらしさを感じました。カミイも毎日お泊まりで忙しそうですが、また、元気な姿にお会いしたいものです。

★センターのバスに乗っているカミイを何回か見てまいりましたが、家に来てくれて驚いています。息子が玄関に連れて来た時から隣にいて、おやつを食べさせたり、一緒にテレビを見たりニコニコしていました。「カミイのお風呂はどうする？」ときくとその時ばかりは「カミイは入らない」と現実的な事を言っていました。息子より少し小さいカミイは一晩兄さんの顔を覗かせてくれました。

★朝、出かけに「今日、帰りにお友だちと一緒にだよ」「夜ご飯何にしようか」「大丈夫、僕もう決めてあるから」の会話。帰りのバスが通った時見えました。降りて「ほら、お友だちだよ。よろしくね！今夜卓球に行く日だからつれていってやるよ。みんなに見せてやりたいから。」とにぎやかな一日でした。また、来てください！

★昨日、我が家にも待ちに待ったカミイがやってきました。すごく嬉しかったらしく、息子はずっとニコニコしっぱなしでした。家の中をどこへ行くにもつれて歩き、食事の時は家族とは別のテーブルを出して、カミイとお兄ちゃんと3人でご飯を食べたのでした。夜、寝るとき、カミイと一緒に布団で寝る気でいた息子。それはダメだと言い聞かせてカミイは別の部屋でおやすみすることになりました。でも、カミイが寂しくないように、ぬいぐるみをならべていた息子でした。カミイに接している様子を見て、大事な友だちの一人なんだなと感じ、心が温かくなりました。

★我が家にもやっとカミイがやってきました。「おやつはアイスをあげたよ」とにっこり。晩ご飯、いつもはパスする野菜も「カミイに笑われる。」としっかり完食！思った以上のカミイ効果に私もびっくり！お父さんはケガをしているカミイを少しだけ直してくれました。

IV. 参考資料 (3)

仙石原幼児学園 (神奈川県箱根町立)

1. 平成16年度 箱根町幼稚園実際指導研究発表会

一人一人の豊かな成長を願い費用名環境の在り方を探る
～自然や社会との関わりの中で～

2. カリキュラムに見る、これが合同保育です！

出典；「N o c c o」, Vol.2 (No.1-6), フレーベル館

- ① 2005年4月；保育所・幼稚園のフレームを超えて
- ② 2005年5月；乳幼児期に育てておきたいもの」を共有してプランに
～就学前の保育・教育を考える～
- ③ 2005年6月；家庭とのパートナーシップによる豊かな保育を
～多様な人との関わりと連続性を尊重するプラン～
- ④ 2005年7月；幼小の多様な連携を通して生活・教育の連続性を尊重する
プラン ～就学前の保育・教育を考える～
- ⑤ 2005年8月
- ⑥ 2005年9月

参考資料（3）－ 1.

1. 平成16年度 箱根町幼稚園実際指導研究発表会
一人一人の豊かな成長を願い費用名環境の在り方を探る
～自然や社会との関わりの中で～

平成16年度

箱根町幼稚園実際指導研究発表会

研究主題

一人ひとりの豊かな成長を願い

必要な環境の在り方を探る

～自然や社会との関わりの中で～



平成16年12月1日(水)
仙石原幼児学園

はじめに

仙石原幼児学園が開園して1年8ヶ月が経ちました。

幼保一体化施設は、全国で約200ヶ所あると言われています。それぞれの園で、地域のニーズや要請に応え、いろいろなスタイルで運営しています。

幼児学園では、運営の柱を

- ・ 家庭の状況等によって、幼稚園児と保育園児を分けるのではなく、合同に保育する中でのより質の高い保育
- ・ 0歳児～5歳児までの発達の道筋に沿って、子ども一人ひとりを大事にした保育
- ・ 幼稚園、保育園職員がその専門性を生かし、お互いの理解と尊重の上に成り立つ保育
- ・ 育児相談や子育てサロンなど交流の場の提供で、地域の子育ての核を目指す施設とし、就学前の保育、教育がどうあるべきかを探ってまいりました。

本園の教育目標にある、一人ひとりを大事にした保育の実現には、保育者の豊かな人間性の備えと子ども理解が大切です。子どもとつくる生活の中で、どれだけ本気で子どもと向き合っていけるか、一緒に考え、一緒に悩み、一緒に喜んだりすることができるか…それこそが人間性であり、それを身に付ける努力が専門性に繋がると考えます。

勤務形態がフレックスなので、園内研究の時間も工夫が必要です。近頃では限られた時間の中で、時間の使い方や伝達の方法などお互い上手になってきました。私たちが大事にしている研究の柱は実践です。研究のための研究ではなく、保育のための研究でありたいと思います。日々の実践を記録し、話し合っていく。その中から子ども理解や保育者のあり方が見えると考えます。

今回、箱根町実際指導研究園の指定を受け、公開保育、研究発表という貴重な機会を与えていただきました。ついつい主観的になりがちな保育実践ですが、客観的に見ていただき、ご指導を仰ぐことによって、今後に生かしていきたいと思います。

周りの方々に助けられながら、ここまで歩んでまいりました。まだまだ課題も山積みです。考えることがあるから前に進める、そう信じてこれからも職員一同力を合わせていきたいと思います。

終わりにりましたが、あたたかなご指導とご助言をいただきました、目白大学教授 増田まゆみ先生、箱根町教育委員会指導主事 吳地初美先生、平塚広先生に心よりお礼申し上げます。

平成16年12月

箱根町 仙石原幼児学園
園長 佐野 眞弓

《目次》

I 研究の概要

| | |
|-------------------|---|
| 1 研究主題 | 1 |
| 2 主題設定の理由 | 1 |
| (1) 教育目標の具現化をめざして | 1 |
| (2) 本園の地域環境及び実態 | 2 |
| 3 今年度の取り組み | 3 |
| (1) 昨年度の成果から | 3 |
| (2) 今年度の課題と解決にむけて | 3 |
| 4 研究の構造と方法 | 4 |
| 5 研究の組織 | 5 |
| 6 研究の歩み | 6 |
| 7 研究の観点と方法 | 7 |
| (1) 研究の観点 | 7 |
| (2) 研究方法 | 7 |

II 研究の内容

| | |
|------------------------|---|
| 1 主題の共通理解 ～「豊かな子ども」とは～ | 8 |
| 2 豊かな子どもを育むための環境の在り方とは | 9 |

III 環境の在り方の実際

| | |
|---------------------------|----|
| 1 各クラスの実態について | 10 |
| 2 各クラスの「保育室の環境」について | 12 |
| 3 自然や社会と関わる中で育つもの | 17 |
| 4 各クラスの「自然」と「社会」との関わりについて | 19 |
| (1) 月のねらいと各クラスの反省 | 19 |
| (2) 「自然」と「社会」環境マップづくり | 29 |
| 5 実践事例 | 30 |

IV 研究のまとめと今後の課題

| | |
|---------|----|
| 1 まとめ | 39 |
| 2 今後の課題 | 40 |

I 研究の概要

1 研究主題

一人ひとりの豊かな成長を願い 必要な環境の在り方を探る ～自然や社会との関わりの中で～

2 主題設定の理由

(1) 教育目標の具元化をめざして

近年の少子・高齢化、社会的価値観の多様化、規範意識の低下等、子どもをとりまく社会環境が大きく変化する中、幼児施設に求められる内容も子育て支援、家庭、地域、学校との連携の充実と大きく変わろうとしている。

幼児学園も開園2年目を迎え、幼保一体化施設としての役割を果たすと共に保育内容の充実を図ってきた。

保育目標である「心身ともに健康で、豊かな感性と思いやりの心をもった子どもを育てる」ためには、保育者自身の豊かな人間性と子ども理解が大切になる。日々、子ども達の気持ちにどれだけ寄り添っていけるか、子どもと共に生活を作っているか…そのために私達は、自分自身に豊かな人間性と保育の専門性を身につけていきたい。

そこで人間形成の基礎を培う保育の精神に基づき、一人ひとりの個性と能力を伸ばす保育を実践展開している。また、箱根の特性である自然や文化との触れ合いを大切に箱根教育を推進し、創造的かつ心豊かなたくましい子どもの育成を目指すため、次のような目指す子どもの姿を設定した。

《めざす子どもの姿》

- | | |
|--------------|-------------|
| • 仲良く遊べる子 | • がんばる子 |
| • ありがとうの言える子 | • あいさつができる子 |
| • 感動する子 | • 人の話が聞ける子 |

これらの具体的な《めざす子どもの姿》に迫るためには、まずふさわしい保育環境を整えていくことが求められる。そこで、一人ひとりが生きる力の基礎を育成するために、どのような環境が必要であるかを考え、研究主題を「一人ひとりの豊かな成長を願い必要な環境の在り方を探る」と設定した。昨年度は環境の中でもまず、保育室の環境の在り方を探りそこにおいて必要な援助等は何かを含め、主題に迫っていくことになった。2年目の今年度は少し視点を広げ、保育室の環境の在り方と共に、子どもの遊ぶ園舎外の環境にも目を向け、実践を通し追求していく事にした。それは自然や社会との関わりを通すことによって、より豊かな子どもの成長があると考えたからである。

(2) 本園の地域環境及び実態

仙石原地域はここ何年か就学前の子どもの人数推移は横ばいであるが、他園に比べると園児数は町内の幼児施設の中でも多く、仙石原だけでなく他地域からも通園している。商店が多く建ち並んでいる地区もあるが、まだまだ自然に恵まれ四季を肌で感じることができる。そうした中で、自然や公園など子どもたちの遊べる環境は満たされているように思えるが、実際、降園後の遊びの中心は家庭であり、子どもたちや保護者の交流の場は、幼児学園が担っていると感じている。

また、古くから地元に住んでいる人と他地域から転入してきた人とが混在しており、保護者の生活や価値観の多様化が見られている。親同士の関わりや親の姿が、そのまま子どもたちに表れ園生活の中で難しさを感じているところもある。核家族化が進み、子育てに不安を抱いている保護者も少なくないため、今までの家庭啓発ではなく保育者が同じ目線に立ち、子育て支援をしていくことや、施設内にある子育て支援センターが入園前の子どもたちや保護者にとっての重要なサポートとなっている。

一般教育機関としては、幼児学園、小学校、中学校が一つしかないため、人間関係が固定化しがちで、幼児期からその後長期にわたり影響を及ぼしていると思われる場面も見受けられる。そこで、老人ホームや中学校との関わりを深める交流を盛んに行っている。また、幼児学園が小学校に隣接されたことにより、小学校との関わりも活発に行うようにしている。このことは兄弟も少なく、親との限られた人間関係の中で子どもたちにとって良い刺激となり、豊かな人間関係を築くための方策のひとつとなっている。同じ地域で子どもを育てていくということで、職員にとっても地域との触れ合いは大切であり、今後さらに交流を持っていきたいと思っている。

仙石原幼児学園は幼保一体化施設として平成15年4月にオープンし、同年11月に「幼保一元化特区」が認められたことで、今年度からは職員全員に幼保の併任辞令が与えられた。0歳児から5歳児の子どもに幼稚園、保育園の区別なく教育と養護を大事にした合同カリキュラムに基づく保育を行っている。この幼保一体化は今までの幼稚園らしさ、保育園らしさにとらわれず、目の前の子どもにとっての必要な養護と教育は何かをもう一度考え直す機会となった。幼稚園児降園まで保育園児とともに各クラスで過ごし、各クラスとも保育者が2名ずついる。このことは土曜、休日出勤の振替でも必ずどちらかの担任がいるので、子どもや保護者の不安を取り除くことができている。子どもたちの抱えている問題は様々で、配慮を必要としている子も多く、保育者の課題も大きいので、各クラスT、Tの良さを出し、それに対応できるよう努力している。乳児保育が始まったことは、保育者が実際の子どもの姿を通し、0歳からの子どもの育ちを捉えることができるだけでなく、異年齢児やその保護者にとっても、優しさや思いやり、そして子どもの成長の喜びなど、良い影響を与えている。

3 今年度の取り組み

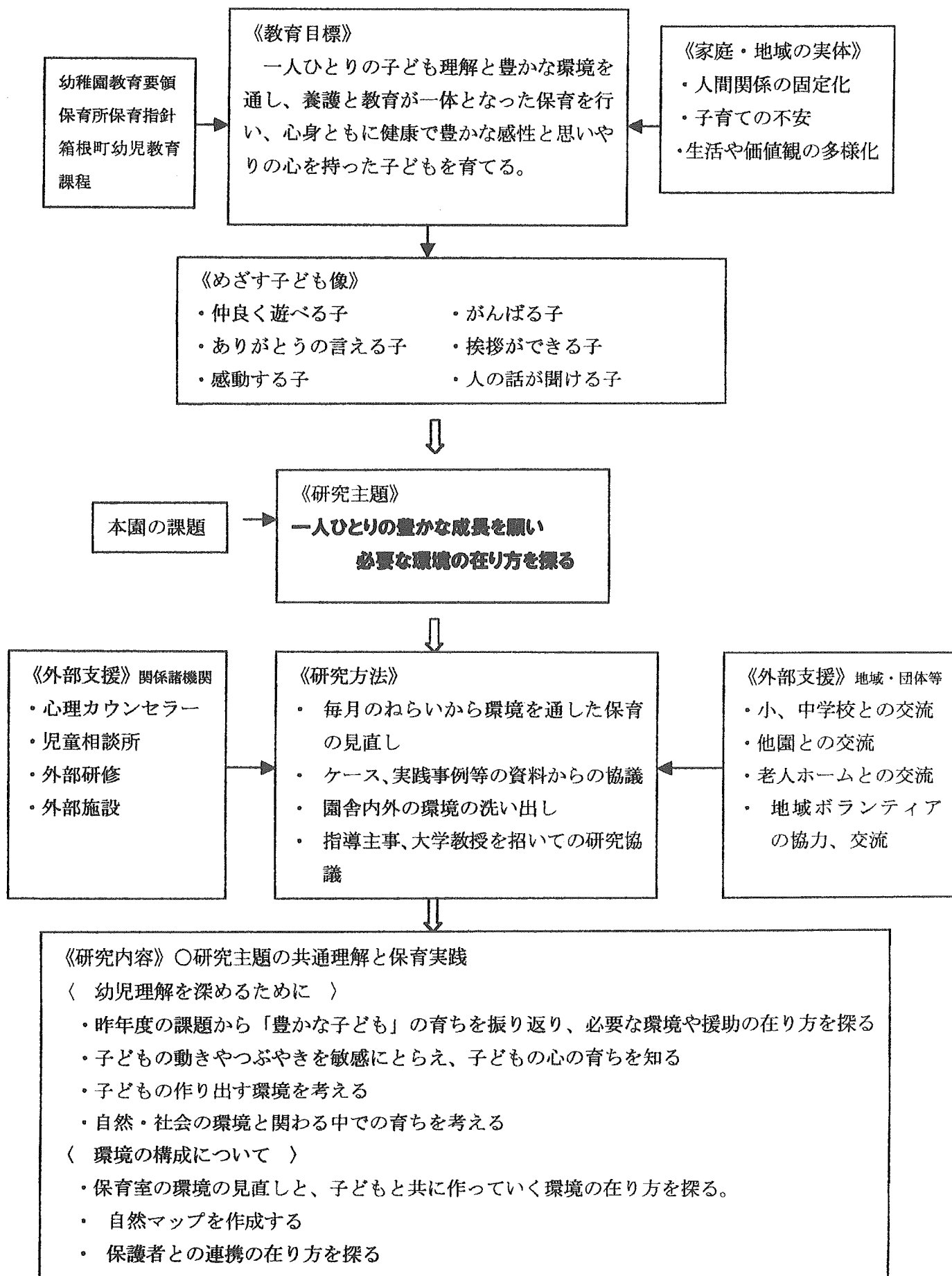
(1) 昨年度の成果から

- ・ 保育室の環境作りでは、保育者の願いと子どもの思いを取り入れながら雰囲気作りや場の設定、遊具、コーナーなどの環境を工夫する事により、安心して遊びに集中する姿が見られるようになった。
- ・ 子どもと一緒に考えながら場を移動したり、充実したりなど、環境の再構成をしていく場面が少しずつ表れている。
- ・ 環境構成を行う上で、特に重要なことは保育者の援助であり、動きを敏感に捉えたり、子どもの声に耳を傾けたり、一人ひとりをきめ細かに追いながら機を逃さずに必要な援助ができるよう保育者が意識している。

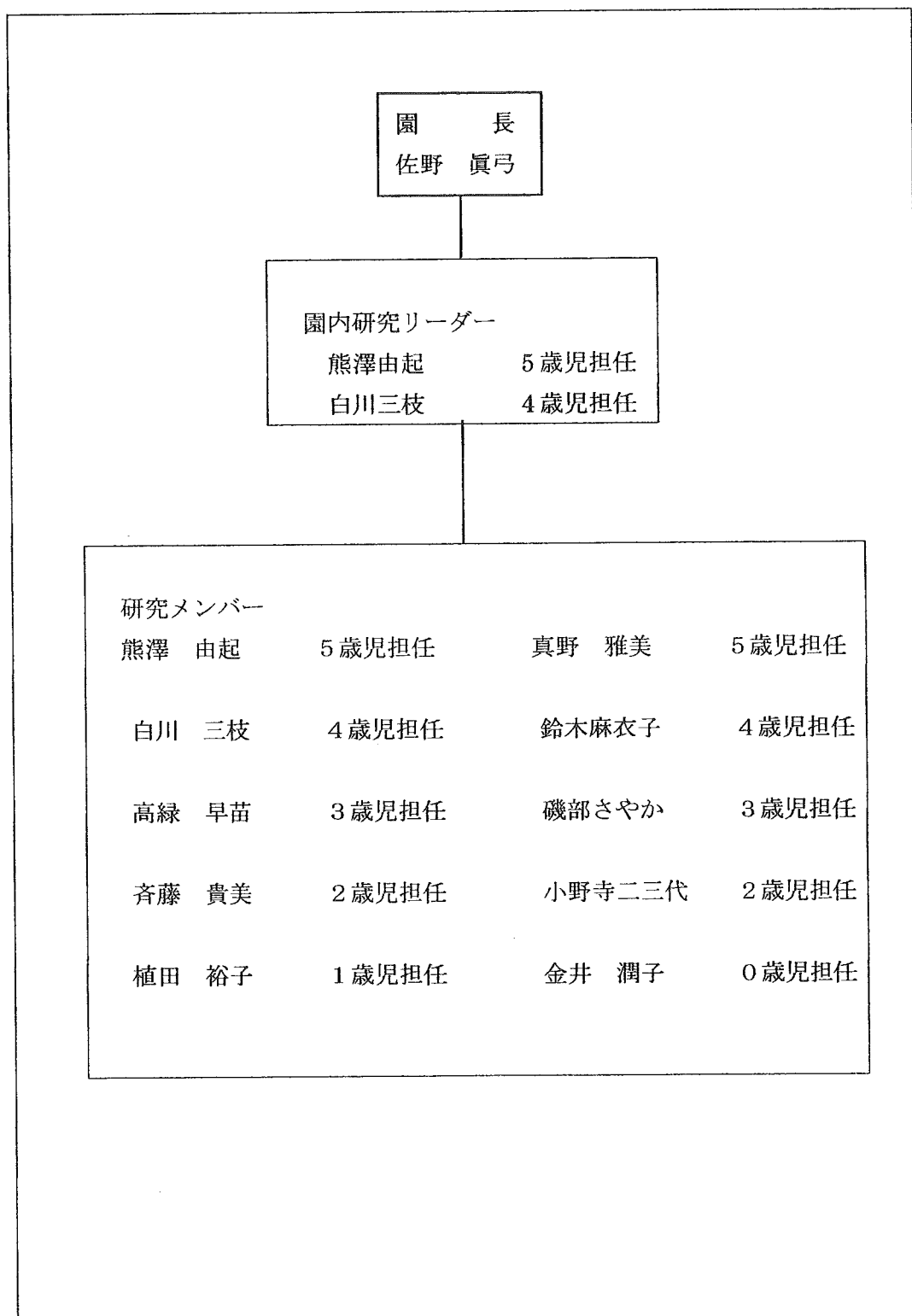
(2) 今年度の課題と解決にむけて

- ・ 昨年度は「保育者が作り出す環境」が多かったので、一人ひとりの思いを大切にしながら、子どもと共に作り出す環境の在り方を更に追求する。
- ・ 幼児学園内や園の周りの環境は四季折々の自然に恵まれ、また箱根ならではの文化や伝統に触れる事が出来る。しかし、異動してきたばかりの職員が多く保育者自身はその豊かな環境をどれだけ知り、保育に活かしているのか、見通した環境作りや援助ができているかを見直す。
- ・ 保育者自身が季節の変化や、様々な社会・自然現象に敏感になり、何を育てたいか、また子ども自らの育ちなど、幼児が身近な自然や社会と関わる中での育ちを実践を通して探る。
- ・ 人間関係が稀薄になっている今、まわりに関心を持たない大人や、日々の忙しさに追われ身近な自然や社会の出来事に目が届かない、といった親の姿があり、自然の豊かさや社会の関わり大切さを子どもに伝えていくと共に、保護者にも知らせることが必要である。
- ・ 幼保一体化の仙石原幼児学園ならではのカリキュラムの作成を含めた就学前教育(保育)の在り方とは何かを深めていく。
- ・ 小学校が隣接しているという立地条件を活かした幼、小の連携の在り方を探る。

4 研究の構造と方法



5 研究の組織



6 研究の歩み

| 月 | 内 容 | |
|-----|--|--------------------------|
| 4 | 園の実態・課題・昨年の反省から研究テーマ（その理由について）を考える 会議等での話し合い（保育者一人々や各クラスの反省等） | |
| 5 | 研究の方向性について（研究計画） 会議等での話し合い（子どもの姿・保育全般について） | |
| 6 | 研究主題や研究方法等についての共通理解 実践研究・実践事例（春）の検討 | 増田先生 呉地指導主事 |
| 7 | 1学期の反省からテーマに迫っていく | 増田先生 呉地指導主事 平塚指導主事 |
| 8 | 『各園園内研究中間報告会』 今後の進め方について | |
| 9 | 研究冊子について 実践研究・実践事例（夏）の検討 | 呉地指導主事 |
| 10 | 研究発表会当日について 実践研究・実践事例（保育室）の検討 | 増田先生 呉地指導主事 平塚指導主事 |
| 11 | 考察・まとめ・資料作成・印刷・発表について 増田先生 実践研究・実践事例（秋）の検討 | 呉地指導主事 |
| 12 | 2学期の反省・公開保育・園内研究発表会「箱根町幼稚園実際指導研究発表会」 | |
| 1 | 考察・まとめ・資料作成・印刷・発表について | |
| 2 | 『各園園内研究発表会』 3学期の反省 | |
| 3 | 今年度の研究の反省・成果と残された課題について | |
| その他 | 毎月の指導計画（自然や社会に対して）の反省 自然マップの作成 | |

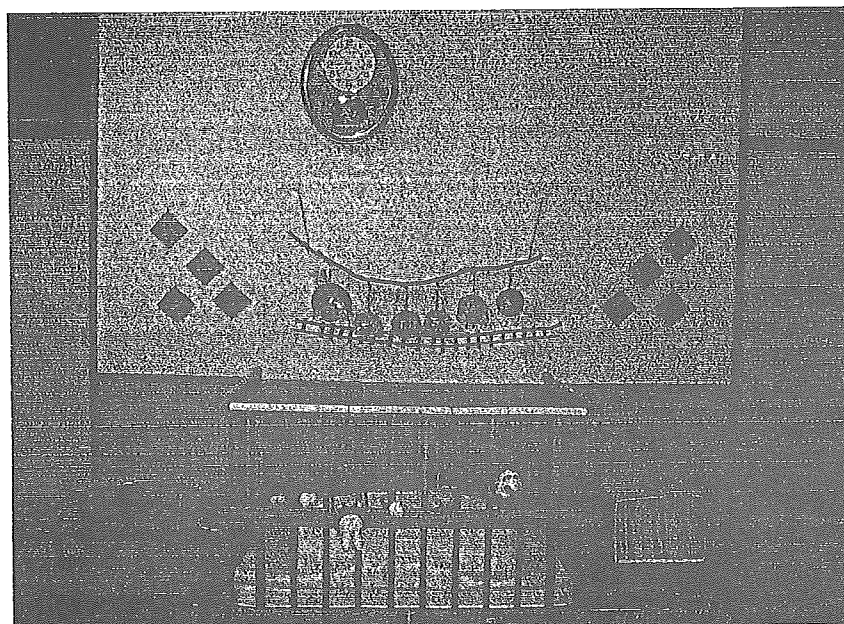
7 研究の観点と方法

(1) 研究の観点

- ・昨年度の課題から「豊かな子ども」の育ちを振り返り、必要な環境や援助の在り方を探る。
- ・子どもの動きやつぶやきを敏感にとらえ、子どもの心の育ちを知る。
- ・子どもの作り出す環境を考える。
- ・自然・社会と関わる中での育ちを考える。
- ・保育室の環境の見直しと、子どもと共に作っていく環境の在り方を探る。
- ・自然マップを作成する。
- ・保護者との連携の在り方を探る。

(2) 研究の方法

- ・毎月のねらいから環境を通した保育の見直し。
- ・ケース、実践事例等の資料からの協議。
- ・園舎内外の環境の洗い出し。
- ・指導主事、大学教授を招いての研究協議。



Ⅱ 研究の内容

1 主題の共通理解

～『豊かな』子どもとは・・・～

《心身共に健康な子ども》

- ・ 元気いっぱい遊ぶ。生き生きとしている。
- ・ 健全な身体の発達がなされている。
- ・ 家庭において十分気持ちを受容してもらい、情緒が安定している。
(お母さんや保育者、友だちが好き。)
- ・ 好き嫌いなく何でも良く食べる。
- ・ 基本的な生活習慣が確立されている。

《素直に表現できる》

- ・ 見たもの、聞いたものを様々な形で表現する。
- ・ 感じたことをその子なりに表現する。
- ・ 感謝の気持ちを持って生活する。

《意欲的に活動し協調できる子ども》

- ・ よく見て考えて行動する。
- ・ 1つのことにじっくり取り組む
- ・ 約束やマナーを守る
- ・ 自分が役立っていることを実感できる。
- ・ 自分の意見を伝えたり友だちの良いところを認める。
- ・ いろいろなことに興味を持ち、進んでやろうとする。



2 「豊かな」子どもを育むための『環境の在り方』とは…

<保育室の環境>

- ・ 子どもの興味、関心に合わせた場や空間がある。
- ・ 遊具や用具、材料や素材が適切にある。(コーナーの充実)
- ・ ゆっくりとくつろげる。安心できる。
- ・ 子どもの動線に合わせた場の設定。(場面に応じ、再構成されていること。)
- ・ 安全で衛生的である。
- ・ 自然が生かされた環境がある。

<子どもが作る環境>

- ・ 自由に遊ぶ時間や場所が保障されている。
- ・ 刺激を受け、心を動かせる。(なんだろう、どうして、こうしてみよう)
- ・ 必要な物が自分で準備したり、取りだしたりできる。
- ・ 共感できる友達がいる。
- ・ 友だちや保育者と一緒に生活をつくっていく。(力を貸してくれる人がいる。)

<子どもが遊ぶ園舎外の環境>

- ・ 自然環境を取り入れることができる。
- ・ 身近な自然を感じられる。
- ・ 四季折々の自然に十分触れ、体験できる。
- ・ ダイナミックな遊びができる場がある。
- ・ のびのびと遊ぶことができる。
- ・ 自分たちの住んでいる地域を知り、関わって遊ぶことが出来る。
- ・ 異年齢が関われる空間とその年齢だけで遊ぶ空間が保障されている。

<人的環境>

- ・ 信頼できる大人の存在がある。(モデルになる保育者)
- ・ 地域の人との関わりの中で優しさや思いやりに触れる。
- ・ 友だちと一緒に遊ぶ中で葛藤やいろいろなことを考えたり、協力したりする。
- ・ 自分が愛されている実感がある。
- ・ 異年齢の関わりが持てる。

Ⅲ 環境の在り方の実際

1 各クラスの実態



《0歳児 いちご組》

11月現在、1歳4ヶ月の女児1名と10ヶ月の男児1名が入所しており、1歳児と共に生活をしている。

初めての社会との関わりとなる保育者の存在は大きく、一人ひとりと丁寧に関わることで愛着関係を深めてきた。子どもの表情を見逃さず、気持ちに共感したり受け止めることを繰り返す中で、特定の保育者には自分の欲求を表情や態度、声などで十分に表現したり、関わりを自分から求めてきたりするようになってきた。

食事、睡眠等の生活リズムも個々で違うので、職員の連携をとりながら園での食事や睡眠が個々の生活の流れとして押さえていくようにしている。又、保育時間も長いので子育ての楽しさや子どもの成長を保護者と共有していくことを大切に、保護者との関わりも密にしていきたいと思っている。



《1歳児 つくし組》

男児6名、女児3名、計9名のクラスである。

新入園児5名もだいたい環境に慣れ、自分の思いを言葉や動作で表現できるようになってきている。しかし、不安になってしまう日もあるので一人ひとりの思いを受け止めていくように心掛けている。

友だちや保育者と関わって遊ぼうとする姿も見られる。まだ自分だけの思いを通そうとするので友だち同士の関わりでは、保育者が一人ひとりの子どもの気持ちを伝え合ったり、子どもの思いを受け止めていくようにしている。

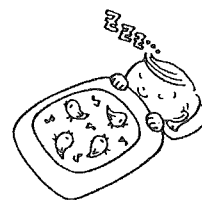
連絡帳等を利用し、園であった出来事等も伝えながら、子ども達の成長と一緒に感じ、子育てをしていきたいと思う。まだ乳児なので、乳児に合わせた個々の対応を心掛け、家庭とも十分な連絡をとっていき、子ども達に負担の無いようにしていきたいと感じる。

《2歳児 ちゅうりっぷ組》

男児6名、女児5名、計11名のクラスである。

入園当初は遊具等の取り合いで喧嘩になると、噛み付くことや、引っかく事が多かったが、保育者が繰り返し伝える事で徐々に減り、自分から「貸して」と言ったり、友だちに貸す姿が見られる。一人で遊ぶ事が多かったが(粘土、絵、ブロック等)、友だちと関わる事を楽しみ、一緒に踊ったり、Bブロックで鉄砲を作ってはヒーローものに変身し、ごっこ遊びをたのしむ。

園で長時間保育する子どもが多い。休み明けが一番落ち着きがない。その事を配慮し、1日の保育を考える。家庭の実態がそのまま現れる子どもの姿があり、家庭的な配慮がまだまだ必要な年齢であるので、一人ひとりに合わせた援助を心掛けている。





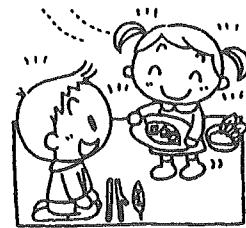
《3歳児 もも組》

男児16名、女児12名、計28名のクラスである。

個々で遊びを楽しむ姿が多かったが、少しずつ友だちとの関わりも多く見られるようになる。友だちと一緒に遊ぶが、トラブルも多く、その都度保育者は互いの気持ちを聞き、伝え、仲立ちとなる。自分を主張することも多いが、時には友だちの存在に気付いたり、思いに気付く等の姿も見られる。3歳児なので甘えたい気持ちを保育者は十分受け止め対応していくように心がけている。

子どもによって遊びは様々であるが、一人ひとりのペースに合わせて援助している。まだ3歳児なので一人ひとりを大切にという思いで日々保育している。

生活面では、支度、排泄、着脱、食事と個人差が大きいですが、個々に合わせて対応することで、少しずつ自分でしようとする姿が見られたり、保育者と一緒にする事を喜んでいる姿も見られる。



《4歳児 ゆり組》

男児18名、女児14名、計32名のクラスである。

男児はブロックコーナー、女児はままごとコーナーや製作コーナーで自分の好きな遊びを見つけたり、縄跳びに挑戦したりして遊ぶ姿がある。友だちや保育者と一緒に伝承遊びをする等、友だちとの関わりが随分増えその中で一人ひとりが葛藤する姿も多い。それでも友達と遊ぶ事が楽しく、喜んで登園する姿が見られている。友だちとの関わりは園が主であるが、友だちの家庭との行き来は母親の繋がりである。友だち関係が広がった分固定化しないように配慮していく。

保護者と一緒に子育てをする楽しさを共有しながら、子ども達の良いモデルとなれるように心掛ける。

又、幼稚園13名、保育園19名と約クラス半数が2時に降園することで2時までとそれ以降の活動を工夫して考えている。



《5歳児 さくら組》

男児15名、女児11名、計26名のクラスである。

自分達なりに遊び方を見つけられたり、考えられたり出来るようになってきている。家庭で大事に育てられ安定している子が多い、色々な事がわかる分周りの目を気にしてしまい、自信が持てない姿が見られる。子どもから出てくる表現・思いを認めていくと、少しずつ伸び伸びと色々な方法でその子なりに表現できるようになってきている。

知的発達や発達のバランスに課題を抱えた子どももおおり、個人差が大きいので5歳児としての集団を大事にすると共に、個々に合わせた環境や援助を考え保育を進めているところである。

子どもの興味に合わせた環境とまた保育者の願いをもって作り出す新たな刺激とで環境の再構成をしていった。

2 各クラスの「保育室の環境」について

(0・1 歳児)

| | | |
|---------------|--------------------------------|--|
| <p>1学期～</p> | | <p>0・1 歳児</p> <p>● 在園児は、慣れ親しんでいた保育室なので安心して、よく遊ぶ。新入園児は、不安で泣く子もいるが、保育者と関わったりしていくうちに遊び始める。</p> <p>● 子どもが不安定で園に慣れないので、幼児クラスとは時間をずらして園庭に出たり、ウエアドテッチキをつかいながら、遊ぶ時間を取る。</p> <p>● 睡眠時間がバラバラなので寝ている子の観察と起床している子の活動がそれぞれ出来るように、保育者間でフェルトで作った花の壁面を作る。</p> |
| <p>0・1 歳児</p> | <p>＜食事の時＞</p> <p>保育者 子どもたち</p> | <p>● 腐材を使って、手作りおもちゃを作る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● コロコロボール ● 型はめ ● パスケットボール ● 動物の形を、楽しむ。 ● 飾り感を楽しんだり、上手になる。 ● だんだん形を覚えていく。(フェルトで作る) ● 季節ごとに絵を変え、8月・9月・10月・11月…秋の果物 ● 6月が大好き、「りんご、ぶどう」「」と喜び、声にたたくしている。 |
| <p>0・1 歳児</p> | <p>＜食事の時＞</p> | <p>● 小さな机で保育者と子どもたちと一緒に食事をすすめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 「先生と同じっ。おいしいねっ。」などと会話を楽しくする。 ● 天井壁面を作る。 <ul style="list-style-type: none"> ● 8月…かまぼこ ● 9月…赤トンボ ● 10月…まぼこ ● 11月…葉ち葉 ● 「まぼこは？」「と尋ねたり、「トンボいたね」、「まぼこは？」と尋ねたり、「トンボいたね」と同じように出来事を話す姿があった。 |
| <p>2学期～</p> | | <p>0・1 歳児</p> <p>● ずっと同じような配置で過ごしていたが、本棚の上に乗ったり、ベビベットの上面に登ってしまったりが増え、危険だった。</p> <p>● 夏頃からクラスの大半分がトイレトレーニングを始め、トイレに行く回数・行く子どもが増えた。衛生的な事も考え、トイレの入り口には消毒機で清潔さを保つよう工夫をしようとする。</p> <p>● トイレに行くとき、自分で石鹸を使って、手を洗う姿やマットの上で「ヒカヒカ」と言っていて、足を見られている姿が見られた。</p> |
| <p>0・1 歳児</p> | <p>＜食事の時＞</p> | <p>● 玩具やテーブルが置いてあると、ぶつかったりして危険だが、保育者の配慮で1日の中でも環境の再編成をしていく事で子どもたちは伸び伸びと遊んでいる。</p> <p>● 週に1回あるリトミックに参加したり、ホールなどで遊ぶ機会などもつくっていく。</p> |

(2歳児)

| | | | | |
|-------------|-------------|---|--|--|
| <p>1学期～</p> | | <p>● 窓側に本棚が置いてあったが、窓と本棚の間で遊ぶ隙間に子どもが入って遊んでしまい、危険であった。</p> <p>● 4月当初、新入園児は、兄弟で離れる事に慣れず、朝も落ち着かなかった。</p> | <p>● 本棚の位置をロッカー側へと移動する。本棚の上に、おもちゃごと・キッチンセットを置く。後ろに支えが無い為、キッチンセットが床に落ちてしまう事が多かった。(4月の図)</p> <p>● ままごととコーナーで遊ぶ子どもが多い。友だちと色々な人になりきって、ごっこ遊びもしている。</p> <p>● 大きなマットを敷いて、コーナーを広くする。</p> <p>● 本棚と窓の隙間に入る子もいなくなり、遊びに集中している。</p> | <p>● 1学期～</p> |
| <p>2歳児</p> | | <p>● 遊び台は、ちゅうりっぷ組の床だと滑りやすく危険なのでホールに置き、ホールで使用するようにする。</p> <p>● 壁面は、子どもたちの体験した事や季節に合わせて、保育者がつくって飾っている。春…桜、夏…花火、秋…落ち葉、さつまいも</p> <p>● 「僕たちが治って来たやっだね。綺麗だね。」というようにも聞こえ、子どもたちも嬉しそうにしていた。</p> | | <p>● 玩具はまとめて同じ所に配置しているが、それを自分で遊びが十分に楽しめるように保育者が広いスペース作りを心がけ、玩具を運び、遊ぶようにしている。</p> <p>● 子どもたちが、自分達で遊びの場を決めて、好きな場所で遊びを楽しんでいる。</p> |
| <p>2歳児</p> | <p>1学期～</p> | <p>● 夏は子どもの人数も増え、少なかったの、何度か3歳児の部屋で台回保育にする。食事の時は、やはり人数が多くなって落ち着かない。2歳児だけで生活するほうが子どもたちにとっても良いと考え、クラスで生活をする。</p> <p>● 7・8月の暑い日は、ウッドデッキでプール遊びをする。</p> <p>● 水遊びをとても楽しんでやっていた子がいる反面、やりたがらない子もいる。</p> <p>● やりたくない子は散歩・外遊びなどで個別対応をしていく。</p> | <p>● 2学期～</p> | <p>● 2歳児</p> |